

中国古典籍の偽書について

坂出祥伸

本稿は平成一四年度の本学大学院文学研究科での中国文献学の講義の一部であり、その後増補したものである。

某大学の大学院学生が、その論文の中で晋の張華の撰とされている『感応類從志』の一句を引用していて、論文の主題の資料の一つとしているのである。

この論文は当該の専門分野の学会で口頭発表され、さらには学会の査読委員の審査を経て機関誌に登載されたという。ということは、その学会の論文を審査された委員も、また偽書についての知識をもっていなかったから、何らの指摘もしないで堂々と学会の機関誌に掲載させたのであろう。ところが、この書について説明すると、その後の六朝時代に張華の名に託した偽書なのである。漢籍目録には、当然のことながら所定のルールに従って「晋・張華撰」と記載されている。そこでこの論文の著者である若い学生は、偽書かも知れないという疑いも一点も抱かず、書物の素性について『四庫全書総目提要』などで調べることもしないで、漢籍目録の記載をそのまま信じて晋代の資料として使ったようである。『四庫全書総目提要』雑家存目には、「旧本は晋の張華の撰と題されているが、隋唐以来の経籍志や芸文志には皆載せられていないし、諸家の書目にも著録されていない。書中の語に俚陋りろうが多く且つ皆妖妄ようおう壓制おんせいの法である。それが（張華の名に）依託いたくされていることは疑いない。」とある。古来中国の典籍には著名な人物の名に仮託された著作が多い。漢代の東方朔とうほうしやくの名に託した著作はいくつもあるがすべて偽書である。こういうことは古典を扱う者には実は常識である。古言に曰く、「尽く書を信ずれば書なきに如かず」と。私はこういう状況にたいへんな危機感を覚えたのである。というのは、事は論文投稿者の学生だけに止まらない。近年では、学会の査読委員をされた年季を積まれた研究

者ですら偽書についての知識が不足していることが分かったのである。

これが本稿を草する動機である。つまり、当該の若い研究者だけの問題としてではなく、中国の古典籍を専門的に扱わない研究者にも、偽書というものの存在と古文獻への対応のしかたをわきまえていただきたいというのが本稿を草した主旨なのである。

中国で古典籍の偽作が古くから行われていることは、周知のことである。『偽古文尚書』（晋の梅賾ばいやくの偽撰）、『孔子家語』（魏の王肅の偽撰）がすぐに思い浮かぶが、左丘明の撰とされる『春秋左氏伝』も劉歆りゅうけんの偽作とされて一時論争が行われた。『周礼』は周公の作とされているが、決して西周の制度そのものが記載されているのではないこと、まったく常識に属する。雑史類や小説類では六朝時代の偽作とされるものが多い。『西京雜記』は『隋書』経籍志には晋の葛洪撰とされているが、葛洪というのは後人の仮託だろうとされている。

ただし、偽作とされたものが、近年の出土資料によって否定されることもある。『文子』は、老子にもとづいた偽作とされていたが、近年、竹簡に書かれた文字が出土して、ほとんどが伝本に近いことが分かった。

また、一概に偽書といっても、後世の誰かが原文に付加したようなものもある。最近私に、医学文献についての問い合わせがあった。その質問は葛洪の『肘後備急方』に、「 Deng 熱 についての記事があるので、葛洪が初めて Deng 熱を記述したという説が最近ある論文に出ているが、本当か教えてほしい、ということであった。そこで、該当の記事を読むとそれは「姚氏の水毒に中たる秘方」であり、そこには「又言う、水病に中たれば……」となっていて、葛洪自身の文ではなくて後世の姚氏（実は北周時代の姚僧坦）の治方が附加されているのである。『肘後備急方』の現行本は、葛洪の原書に幾たびか後世の人が増益して伝わっているのである。この事情を押さえておかなければ全く誤解してしまうのである。中国古代の医薬書はこのように原書に後人が附加して今日に伝存しているものが多いので

ある。こういう事情については、中国の文献についての知識や訓練を受けていない人には理解されていないようである。

まず、『四庫全書総目提要』の該当の書名の解説を読めば、ほとんどは偽書かどうか分かるのであるが、以下には偽書を専門的に取り上げて解説した書物を紹介したい。

私の論文にはしばしば、こういう考証を必要とする古文獻を資料として使用しているので、そのひとつ『列仙伝』の場合を考えてみよう。

『列仙伝』 漢劉向撰

『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』を調べると、この伝記は「列仙伝 漢劉向撰」と記載されている。現行本には『古今逸史』『秘書二十一種』『夷門広牘』『五朝小説』『琳琅秘室叢書』『道蔵』『洞真部記伝類など』があるが、『道蔵』本にもとづいて校定した清の王照円『列仙伝校正本』二巻讚一卷が信頼できる。

晋・葛洪は『抱朴子』内篇・卷二「論仙」で、「劉向が編纂した『列仙伝』には七十人余りの仙人を載せる。もしその事がないのなら、捏造して何になるう？ 太古の事は、この目では見られない。すべて記録によるか、昔からの伝聞による、しかない。ここに『列仙伝』というはつきりした記録がある以上、仙人は必ずある。」(本田清訳による)と述べていて、『列仙伝』は劉向の著作であるとした上で仙人の实在の証拠としている。そして『隋書』経籍志卷二「経籍二史」つまり史部の次の「雑伝」に「列仙傳讚三卷 劉向撰 馮續 孫綽讚」「列仙傳讚二卷 劉向撰 晋郭元祖讚」と二種の書名が記載されている。また、その解説には、

又た漢の時に、阮倉は「列仙圖」を作り、劉向は経籍を校勘すること
を典り、始めて列仙・列士・列女の伝を作った。皆其の志尚に因つ
て、率爾にして作った。正しい史書ではない。

と記されているから、この『隋書』経籍志が編纂された唐初には劉向撰『列仙伝』という伝記が存在していたのであろう。しかし、『漢書』卷三六

「楚元王伝」の劉向の伝記には、『列女伝』を著したことが記されているだけであり、『漢書』芸文志には儒家者流に「劉向序する所の六十七篇」とあり、その班固の注に「新序、説苑、世説、列女伝頌圖なり」と説明されている。その他に道家者流に「劉向説老子四篇」、詩賦略に「劉向賦三十三篇」が著録されている。これが『漢書』芸文志における劉向の著述に関する記載のすべてであり、肝心の「列仙伝」は『漢書』芸文志にはまったく著録されていないのである。その撰者の班固が書き忘れたと思うかも知れないが、班固は漢代きつての大学者である。書き忘れることは絶対にならない。そこで、劉向が『列仙伝』を撰じたことや、『列仙伝』そのものについて後世疑問が出されてくるのである。

まず、北齊の学者顔之推の『顔氏家訓』書証篇に、「列仙伝は劉向の撰したものである……。而るに贊に、七十四人は佛經に出づ、(中略)皆後人の属(まぜる)する所に由る。本文に非ざるなり」という。この「七十四人は佛經に出づ」以下の文は今本の『列仙伝』には欠いているが、おそらく顔之推の当時のテキストにはあつたのである(釈道世『法苑珠林』积法琳『破邪論』の引用ではこの語がある)。顔之推は『列仙伝』全体を偽撰と疑つたのではなく、その贊の部分が劉向の本文ではないことに注意したのである。その後、南宋の陳振孫『直齋書録解題』(卷十二神仙類)が同じく贊の部分を拠り所として『列仙伝』そのものが偽書だと論じている。

漢の劉向の撰、凡べて七十二人は、伝毎に贊が有る。劉向の本来の書ではないようだし、西漢の人の文章ではなさそうだ。

と。陳振孫は文氣から推して前漢のものでないと論じているのである。清朝の考証字は古籍に対して厳密に批判的な態度をとるのであるが、そういう風潮の中で姚際恒『古今偽書考』が著された。その子類に『列仙伝』を取り上げている。陳直齋すなわち陳振孫による前引の推測を掲げた後、

私が考えてみるに、漢志は劉向の新序、説苑、世説、列女伝を載せているが列仙伝は無い、それが偽書であることを証明できる。たぶん列

女伝にもとづいて此の列仙伝ができたのであろう。その、「百家の中を歴観し、そうして相検験するに、仙を得た者は百四十六人、そのうち七十四人は、已に仏経に記載されている。そこで、七十二人を検び、そうして多聞博識の者に広く観ていただくことにする」とあるが、西漢の時にどうして仏教經典があるのか。それが六朝人によって作られたものであるのは、どうしても疑いがないであらう。

「百家の中を歴観し」以下の引用の文章は、『世説新語』文学篇の劉孝標注に引かれた「劉子政(向)列仙伝に曰く」であり、文中、姚際恒は原文の「故撰得七十」を「故検得七十二」と改変している。つぎに『四庫全書総目提要』を見てみよう。その子部道家類に『列仙伝』二巻が著録され、「兩淮鹽政採進本」によっている。

舊本は漢の劉向の撰であり、古来の仙人を紀し、赤松子より元俗に至るまで、凡そ七十一人、人ごと讚を附し、篇末にも又た総讚一首を為っている。その体例は全く列女伝に仿っている。陳振孫の書録解題に謂う、西漢の文字に似ていない。必ず劉向の撰ではあるまい、と。黃伯思の東觀餘論に謂う、是の書は劉向の筆になるものではないといつても、記事は詳らかで語は簡約、詞旨は明潤であり、おそらくは前漢の人の作であらう、と。今是の書を考えてみるに、隋書經籍志が著録しているのであるから、梁より前に出ているのであり、又た葛洪の神仙伝序でも亦た、此の書を劉向の作だと称しているから、晋の時には已にその本はあつたのである。しかるに漢志では「劉向序する所の六十七篇」を列しているが、但だ「班固注に」新序、説苑、世説、列女伝図讚が有るだけで、列仙伝の名は無い。又た漢志に録されているものは、皆七略に因つており、其の総讚は孝經援神契を引いており、漢志に載せられていないものである。涓子の伝にその琴心三篇は、条理が有ると称しているが、漢志の蚡子十三篇と合わない。老子の伝には道德經上下二篇を作つたと称せられるが、漢志と又た合わない。均

しく自ら相違異することはありえないから、或は魏晋の間の方士が之を為り、名を向に託したのであらうか、と。

この議論で論じ尽くされているのかのように思えるのであるが、黃雲眉は『古今偽書考補証』で『四庫全書総目』の説を補つて、

作者は劉向ではあるが書は宋以前の本ではないと信ずる。思うに文選の注の引用が、すでに今本には無いのであるから、四庫全書総目が旧本だと信じているのはもとより誤りである。しかし、仏教經典は後漢の桓帝・靈帝の時に始めて訳本がでたのであるが、それは劉向が歿して二百年に近い。孫志祖は反つて今本に仏経に出るの語がないことから、劉向の作つた旧本ではないことを証明しようとしているが、ことに誤つてゐる。その作者の時代について、東觀餘論は東京(洛陽・後漢)だらうと推測しており、姚際恒は六朝だと断定しており、総目は魏晋の間だと言っている。考えてみるに、葛洪の神仙伝序がすでに、この書は劉向の作だと称しているから、六朝の説は根拠とするに足りないし、東京というのもまた此れらの文字(後漢時代の文章)はない、要するに総目の言つところを妥当とするしかない。

孫志祖は、清朝の学者で『讀書脞録』七巻続編四巻(嘉慶四年)があり、『皇清經解』に二巻続二巻を収む(これからの引用)。

張心澂『偽書通考』はその下巻の「道藏」のなかで『列仙伝』を取り上げているが、黃伯思、陳振孫、姚際恒、四庫全書総目提要などの諸家の説を紹介して便利ではあるが、特に新説を立ててはいない。ただ、胡心麟『四部正譌』を引用している。

案ずるに、漢書芸文志の劉向叙する所の六十七篇は、止だ新序・説苑・世説・列女伝のみであつて、此の書が載っていない。劉歆が定めた所(七録)に、果たして向の此の書が有れば、班固は決して書き遺さないだらう。思うに偽撰であらう。きつとこれは六朝の間の人が、

劉向が列女を伝し、又た神仙家の言を好んだのに因つて、遂に偽撰して之（劉向）に託したのである。その書が既に真だと為せないのであれば、伝を書いた人も亦た必ずしも皆實在してはいないであろう。この伝（『列仙伝』）を考察してみると、孫綽及び郭元祖が各々贊を為っているから、六朝時代でないとするれば三国時代であること疑いない。

偽書に関する最も新しい成果である鄧瑞全・王冠英主編『中国偽書綜考』（一九九八年）では道蔵部（一）洞真類で『列仙伝』を取り上げている。『隋書』経籍志以来『四庫全書総目』までの諸家の考証を列挙しているが、どうしてか黄雲眉『古今偽書考補証』も引用されていないばかりか、『列仙伝』を資料として使用する場合に必見の『四庫提要弁証』も採用されていない。そこで、この『四庫提要弁証』（巻一九子部一〇）の考証の要点を引用しておこう。その重要な点は『道蔵』本『雲笈七籤』巻一〇八所引の『列仙伝』を基本に考察していることである。その『列仙伝』については、

「雲笈七籤は」列仙伝を録して一卷とし、すべて四十八人、人数には削除があるものの、前後の次序は今本とまったく同じで、文字も大きな差異はない。ただ、一二字異なっているだけである。雲笈七籤は宋人の張君房が著わしたものであり、君房は大中祥符年間に勅を奉じて秘閣の道書を編集したのであり（郡齋讀書志卷十六に見える）、これが『道蔵』の祖本であり、「列仙伝の今本は」皆『道蔵』より出ている。それが大きな異同がないのももつともなことだ。馬師皇伝に「治」の字が三つあるが、七籤本では前の二つの「治」の字はみな「理」の字に作っている。思つに唐代の本にもとづくのであろう。しかしながら、唐宋代のいくつかの類書に引かれる佚文にはない。思つに君房が偶たまある刪節本に拠つて道蔵（雲笈七籤）に収め入れたのであり、諸書に引かれているのが、原本なのである。『說郛』（明写本に拠る）に収録されている『列仙伝』は、全て七十人であり、今本と

同じであるが、次序先後はまま合わない点がある。又た序文一篇が多から、これは又た他の別本である。

と説明し、さらに『芸文類聚』『太平広記』などの類書に引用されている列仙伝の仙人の伝記をも考察の対象としている。かくして余嘉錫は、今本は唐以前の旧本ではなく、必ず宋以後の黠道士のしわざだろつ、と推測している。

参考にすべき我国の文献として、福井康順「列仙伝考」（『福井康順著作集』第二巻所収、法蔵館、一九八七）澤田瑞穂訳「列仙伝・神仙伝」解説（平凡社、一九九三）を挙げておく。

『周礼』

まずこの経書の内容について、日原利国編『中国思想辞典』（研文出版、一九八四）の該当項目を引用しておく。

（一）『周官』ともいう。前漢武帝の治世（前二世紀）に、民間から発見されたと伝えられる。現存最古の行政法典。天地春夏秋冬の六官方式をとるが、冬官部分は発見時からすでになく、「考工記」という別の文献を充当する。作者は不明。周王朝創立の指導者周公の行政典範という高い評価に対し、戦国乱世の陰謀家の作とする正反対の見方もある。秦以前の古体文字（篆書）で書かれていたので、経学論争の過程で古文学派に重視され、今文学派に敵視された経緯がある。

（二）天官 職務上は治官 部門の長である冢宰は、六官の全官僚を統括。天官所属の官職六一。地官 職務上は教官 部門の長は司徒。所管領域は教育財政を含む地方行政一般。地官所属の官職七六。春官 職務上は礼官 部門の長は大宗伯。所管領域は国家行為としての儀礼一般。各種祭祀を重要な政務とする祭政一致。春官所属の官職六九。夏官 職務上は政官 部門の長は大司馬。所管領域は国軍の統率を主柱とする狭義の政事一般。この「政」は正す意味で、国軍の任務も不正の懲罰とされている。軍隊の編成は住民組織に対応。夏官所属の官職六六。秋官 職務上は刑官 部門

の長は大司寇。所管領域は法務一般のほか、国賓の接待など雑多。秋官所属の官職六六。冬官 職務上は事官 部門相当の考工記は、車両・兵器をはじめ日常の生活用具および工芸・土木の技術職種三〇と、その製作工程の記述。

(3) 省略

(4) 出現と同時に古文学派に重要視されたが、真に高度安定の学術的地位を確立したのは、鄭玄(一一二七—二〇〇)。杜子春・馬融ら先輩の初歩的業績を承けて成就された鄭玄の成果は巨大。特定実在国家の行政法典としてつくられたのではない本書は、「理念法典」として一種の超越的権威を取得し、現実の行政に対する批判論の拠りどころとなった。王安石の『周官新義』は特色ある利用例。(重澤俊郎執筆)

この『周礼』についての考証を挙げてみよう。

まず『古今偽書考』は、西漢の末に出る。予には別に「通論」十巻があるのですが、ここではこれ以上詳らかにしないう。次に『古今偽書考補証』は、毛奇齡の『周官弁偽』や康有為の『新学偽経考』を引用した後、「周禮の一書は、諸経のうちで最も晩く出ている」という。

張心激『偽書通考』上では、経部礼類で論じられている。

周禮(撰人及び時代を誤認し、並びに改竄有り)

周姫曰撰。

漢書芸文志は周官経六篇を載せ、自註に云つ、「王莽の時、(劉)歆博士を置く」と。顔師古の註に曰つ、「即ち今の周禮である。そのなかの冬官を亡い、考工記を以てこれに充当している」。

隋書経籍志に曰う、「漢の時代に李氏が周官を得たことがあった。周官は蓋し周公が制作した所の官政の法である。「李氏は」河間献王に上つた。ただ冬官一篇を闕いていたので、献王はこれを千金で購入しようとしたが、かくて考工記を入取してそれで補い、合わせて六篇としてこれを上奏した」。

隋・陸徳明は(『經典釈文』に)曰う、「劉歆が始めて周官経を建立し、それを周の禮だとし、東漢末に鄭康成がこれに註するにいたつて、遂に周禮と名づけられた」。

唐・孔穎達は曰う、「(前漢)孝文帝の時にこの書を求めることができたが、冬官の一篇が見えなかった、そこで博士をして考工記を作つてこれを補わせた」(『礼記』疏)

唐・賈公彦は曰う、「周禮は成帝の劉歆より始まつて、鄭玄に成り、之に附離する者大半。故に林孝存は、武帝は周官の末世瀆乱不驗の書であることを知つていた、と考え、そこで十論七難を作つてこの書を排棄した。何休も亦た六国(戦国時代)の陰謀の書だと見なした。ただ鄭玄のみは群経を徧覽して、周禮というのはむしろ周公が太平を致した迹だということを知つて、そこで林碩の論難に答えて、周禮の義理を条通させた」(『周禮正義』所収「序周禮廢興」)

毛奇齡「周官弁偽」に曰う、「周禮は自ずと聖人の経書ではない、ただに周公の作つたものでないばかりか、孔孟以前の書でもない。この書は儀礼・礼記とともに皆同時期に周秦の間に雑出したのである。このことはやや知識のある者は皆指摘できる。(しかし)若し実に某の作だと指すなら、自ら誣妄することになる、これ以上この書を論ずるまでもない」

康有為『新学偽経考』に曰う、「劉歆は諸経を偽作したが、ただ周禮だけは早く人に窺い破られた。(中略)蓋し歆は偽経を為すのに、どんな事についても今学と相反するよう力めている。その成果を総集してみると周官に存するのである。今学は全く孔子より出ており、古学は皆周公に託している。蓋し陽には周公が居撰したことで、「王」莽の篡奪を佐け、陰には周公によって孔子の学を抑圧しているのである。これこそ歆の罪であつて誅すべきものである」(『漢書芸文志弁偽』第三上)

* 原文「不容誅」の「不」は衍字もしくは「非不容誅」とすべきであろう。

張心澂『偽書通考』上下(台湾・商務印書館、一九七〇。上海商務印書館、一九三九の再版。また、上海商務印書館、一九五七年刊は、横組み印刷) 張心澂は現代の学者であるが、生没などの詳細は不明。本書は一九三九年に出版された。本書に収録されて弁偽の対象とされた書は一〇五九部である。

最初に「総論」を置いて「弁偽之緣由」「贗之程度」「偽書之來歴」「作為之原因」「偽書之發現」「弁偽律」「弁偽方法」「弁偽事之發生」を論じ、その後、經(七三部)、史(九三部)、子(三二七部)、集(一一九部)、道藏(三一一部)、佛藏(四一六部)の六部に分けて弁偽考証している。その論じ方は、例えば、「連山易 十卷」と標記し、その下に「偽」と記し、続いて、「連山」についての記事を掲示し、更に黃伯思『東觀余論』以下、崔述『崔東壁遺書補』(上古考信録)に至るまでの弁偽考証の議論を引用している。また例えば、『春秋左氏伝』については、先ず、「誤認撰人、或疑改造」と記した後、なんと六一頁にもわたって偽書としての論議を引用し、中には最近のカールグレンの *On the Authenticity and the Nature of the Tsochuan* (陸侃如訳「左伝真偽考」)までも引用されていて、最後に「心澂按」に始まる「按語」が加えられている。本書は弁偽に関する古い文献や必要な文献(『四庫全書總目提要』をも含めて)を網羅しているの で手っ取り早く調べるのに便利である。

鄭良樹『続偽書通考』上中下三冊(台湾・学生書局、一九八四)

鄭良樹は現代の学者。本書は二三〇部の書について、『偽書通考』以降の学術雑誌に載せられた近現代学者の弁偽に関する論文の要旨を摘録している。

余嘉錫『四庫提要弁証』(科学出版社、一九五八。一九六九年、台湾・芸文印書館一〇冊本『四庫全書總目提要』の第九、一〇冊所収)

本書はすべてが偽書の考証ではない。經史子集に分けて、四庫全書總目

提要の説明を補っている。民国二六年(一九三七)に史部、子部が先に出版され、一九五八年に經部、集部を加えた排印本一冊が出版された。考証の対象となった書は約五〇〇種あり、なかでも子部医家類、小説家類、道家類の考証は綿密精核である。余嘉錫は一八八三年に生まれ一九五五年に亡くなった。輔仁大学で教え、『目錄学』『古籍校誦法』の著述のほか、論文集『余嘉錫論学雜著』(中華書局、一九六三)は歿後に周祖謨が編集したもの。

鄧瑞全・王冠英主編『中国偽書綜考』(黄山書社、一九九八)

本書は、北京師範大学、人民大学、中国歴史博物館、北京社会科学院などの多くの学者が、それぞれ得意とする分野を分担して偽書について考証した共同作業の成果であり、經、史、子、集(詞曲を含む)、道藏、仏藏、近代偽書の七部にわたって、これまでの『四庫全書總目提要』、『四庫提要弁証』、『古今偽書考』、『古今偽書考補証』、『偽書通考』、『続偽書通考』等の成果を継承しながら、偽書の考証を行っていること、道教文献や仏教文献をも含んでいること、さらに近代史の文献についても偽書、偽作として知られているものをも掲げている。おそらく本書はこれまでの弁偽書のなかで最も網羅的なものである。しかし、『四庫提要弁証』でせつかく余嘉錫氏が詳細精密な弁証をしているにも拘らず引用されていない書物もあつて(『列仙伝』『南方草木状』など)、やはり『四庫提要弁証』はぜひ目を通すべきである。

(さかで よしのぶ 元文学部教授・現名誉教授)